

## 聖書の暗号(アトバシュ)と「ダビンチコード」

辻 宏

聖書(旧約聖書)のエレミヤ書に、都市の名前が、暗号で3箇所に出てくる。

原典のヘブル語聖書の本文には、隠されたままの名前で書かれているが、脚注にその隠れた本当の都市名が記されている。日本語聖書(共同訳)は、原典に忠実にその隠された都市名(「シェシャク」、及び「レブ・カマイ」)で表し、括弧内に本当の都市名が「バビロン(バベル)」、及び「カルデア」と併記されている。

この暗号は、アトバシュ(Atbash)暗号として旧約聖書時代に使われた暗号であり、れっきとしたものである。図らずも、ベストセラーとなった小説「ダビンチコード」の謎解きに使われているものである。

ヘブル語のアルファベットは22文字あり、これを11づつ2段に配列する。ヘブル語は右から左に書くので、先ず上段に1~11までの文字を右から左に向かって並べ、段を下げてUターンして今度は左から右に12~22までの文字を下段に記す。先ず、正しい文字のアルファベットの反対側の段に記されたアルファベットを拾い上げて、それを読み取り、採用するのである。

このルールに従って、英語表記のアルファベットを( )に記して例示してみると、次の通りである。

(1)エレミヤ書25章26節、51章41節に、Sheshach( %vveShe-She-K, シェシャク )  
なる都市名が記されている。暗号を解くと Babel( I bB', B-B-L, バベル(バビロン) )  
となり、SheshachはBabelであるとわかる。

(K) (Y) (T) (Ch) (Z) (V) (H) (D) (G) (B) (A)

k(%) y f j z w h d g b a

l m n s [ p x q r ` t

(L) (M) (N) (S) (O) (P) (Tz) (Q) (R) (Sh) (Th)

(2)エレミヤ書51章1節には、Leb Qamai( ymq' ble Le-B-Qa-Ma-Y, レブ・カマイ )

とある。同様に暗号を解くと、Kasdim( K-Sh-D-Y-M, カシディム )となる。

Chaldea( カデア )のことである。

(K) (Y) (T) (Ch) (Z) (V) (H) (D) (G) (B) (A)

k y f j z w h d g b a

l m n s [ p x q r ` t

(L) (M) (N) (S) (O) (P) (Tz) (Q) (R) (Sh) (Th)

預言者エレミヤは迫害と苦難に満ちた生涯を送った。召命を受け(BC626)、神の審判を告知し、敵への降伏を勧告した。しかしてエルサレムの都は蹂躪され、王は捕らえられ、民の指導者達はバビロンに捕囚され(BC597)、やがてユダ王国は滅亡した(BC587)。国が滅んだ後も、尚そこにとどまる事を許されたエレミヤは、国家再建の仕事に当ろうとしたが、強いられてエジプトに行きそこで殉教した。

バビロンは絢爛たる文化を生み、ほぼ1世紀に亘って当時最も栄えた都市であった。エレミヤは神の民を虐げているバビロンにつき、神の裁きに服さなければならぬと、カルデア人の滅びる事を預言し、イスラエルに逃れるよう勧告をする(51章)。

さて、問題は、聖書の中で、何故に都市の名前が暗号で記されねばならなかったかという点にある。殆どの注解書でもこの事はあまり重要視されることなく、詳しく触れられていない。先ず、この時期は、時代的に新バビロニア帝国の滅亡するBC539より以前ではある。「バベル(バビロン)」や「カルデア」の滅亡の預言という直接的な表現を使うことによってもたらされる迫害を恐れて、「シエシャク」や「レブカマイ」と默示的に示したと考えられる。

しかし、この言葉の直前直後に、「バビロン」や「カルデア」が明示されており、必ずしも迫害状況下にあると想定する必要がないのである。ある説に、敵に対する侮蔑や呪術的な意図があつてのことであるとの説明がある。また、同国人にとって「バビロン」の名前からもたらされる恐怖の印象が薄れることのないよう、エレミヤが預言の上で意図して強調しているともいわれる。

しかし、それでもなお、前後の文章の中には「バビロン」や「カルデア」がそのままに取り上げられているのに、何故この箇所だけ、暗号が使われているのかが解せないのである。